

コラム 49ー 上智大学名誉教授の渡部昇一氏

渡部昇一氏は、満州国について、次のように述べています。

「満州族の土地である満州に、満州族の皇帝である溥儀を皇帝とする国を建てることは侵略ではない。世界各国が、植民地に頼ったブロック経済や保護主義をとる米英に対し、日本が生きていくためには、満州国を建て自存自衛の道を探るしかなかった。満州について、戦前の日本人はどのように見ていたか。満州はもともと満州族の土地であり、その満州族の首長ヌルハチが出、その子のホンタイジが満州の地に清と言う国を建てた。その子孫にも偉い人が出て、徳川時代の初期にシナ全体が清になった。日露戦争のあとでシナに革命が起こり、清朝最後の皇帝溥儀が日本公使館に逃げ込んできた。そののち彼が日本の援助で満州族の父祖の地に戻って建国し、初代満州国皇帝になった。時系列としては、これで間違っていない。そして当然のことながら『満州国はシナではない』と言うのが常識になっていた。あの頃の地図を見れば、一目瞭然ですが、満州は『万里の長城』の北にあります。歴代王朝が北方民族の侵入を防ぐために築いたのが『万里の長城』ですから、その外側がシナであるはずがない。満州国は、満州人の皇帝の子孫を皇帝とし、満州人と清朝の遺臣たちを大臣にした独立国であった。そして満州国は超過疎地でしたから、五族協和で満州国皇帝を仰ぐということであった。」